

平成 20 年度

第 1 回 芦屋の里浜づくり実行委員会

議 題 資 料

平成 21 年 3 月 8 日

目 次

1. 里浜づくりの概要	1
1.1 里浜づくりの目的	1
1.2 里浜づくりの手法	2
2. 里浜づくりに向けて	4
2.1 芦屋の里浜づくりワークショップ	6
2.2 技術検討会	8
2.3 実行委員会	10

1. 里浜づくりの概要

1.1 里浜づくりの目的

遠賀川の河口に位置する芦屋港海岸は、かつては海水浴客で賑わう県内でも有数の海岸でした。しかし、その姿は1970年代の地域経済活性化に向けた港湾開発とともに変わりはじめました。

芦屋港の建設以降、港の西側部分には広大な砂浜が広がりはじめ、以前は歩いてすぐにたどりつくことができた水際までの距離が100mを越えるところも見られ、堆積した砂が背後地へ飛んでいます。



芦屋港建設前



肥大化した砂浜

平成18年12月から平成20年3月まで芦屋の里浜ワークショップを開催し、芦屋港海岸の理想の里浜像に向い合意形成されました。

「里浜」とは多様で豊かなかつての「海辺と人々のつながり」を現代の暮らしに適う形で蘇らせた浜のことです。また、「里浜づくり」とは、地域の人々が、海辺と自分たちの地域のかかわりがどうあるべきかを災害防止のあり方も含めて議論し、海辺を地域の共有空間（コモンズ）として意識しながら、長い時間をかけて、地域の人々と海辺との固有のつながりを培い、育て、作りだしていく運動や様々な取り組みのことです。

かつての風光明媚な海岸であった芦屋港海岸を思い出し、自分たちの海岸という認識で「里浜づくり」に取り組んでいくことを目的とします。



図 1.1.1 ワークショップに基づいたイメージ図

1.2 里浜づくりの手法

地域が主体となる里浜づくりは、これまでの施設整備中心の海岸整備や管理のしくみをかえなければ実現できません。

関係する主体の役割を明確にし、協働作業（パートナーシップ）に取り組む必要があります。このため、地域住民、行政、学識経験者の密接な連携のもと海辺とその地域の人々との固有のつながりの目標を明確にする必要があります。

以下に関係する主体の協働作業のイメージ図を示します。

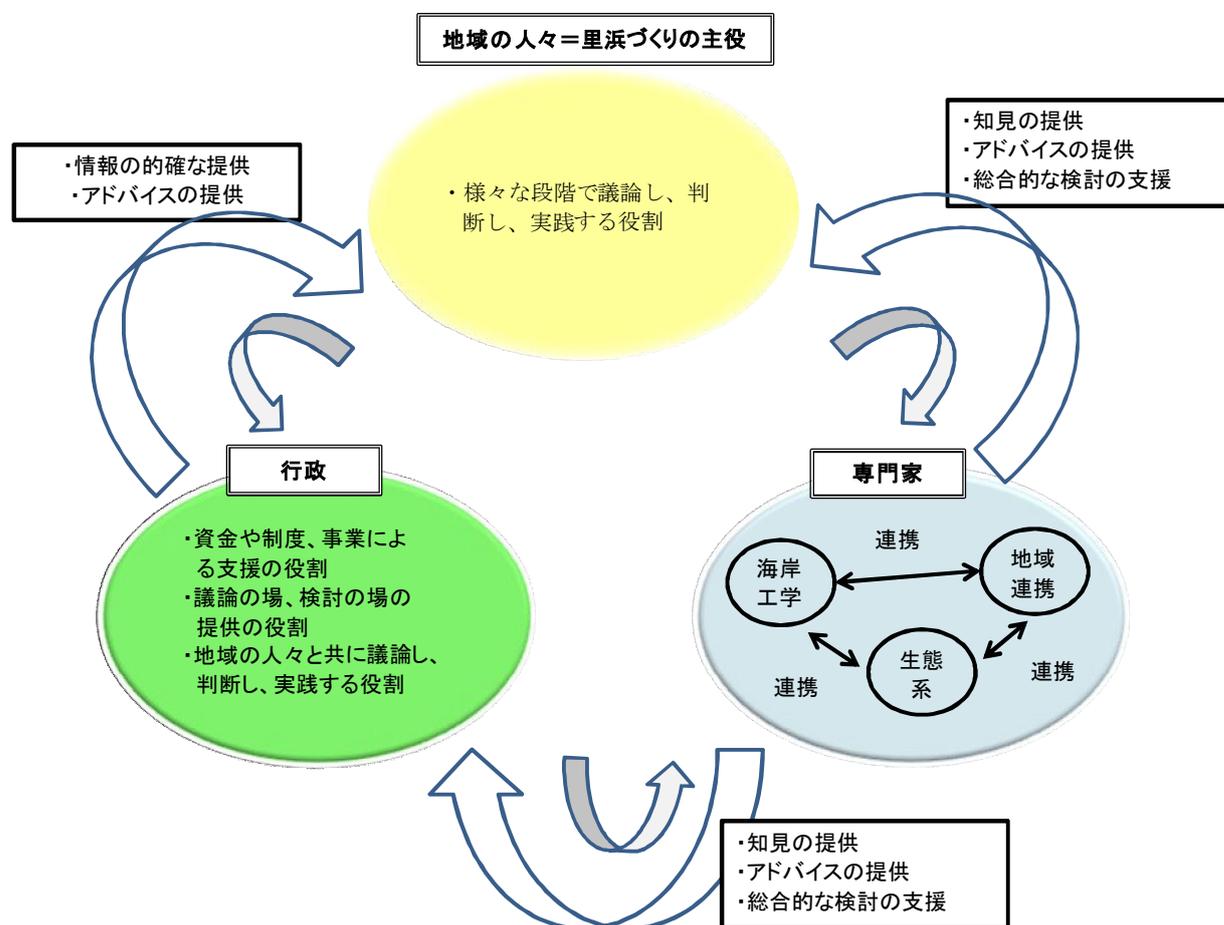


図 1.2.1 関係する主体の協働作業のイメージ

以下に「一般的里浜づくり」のフローを示します。

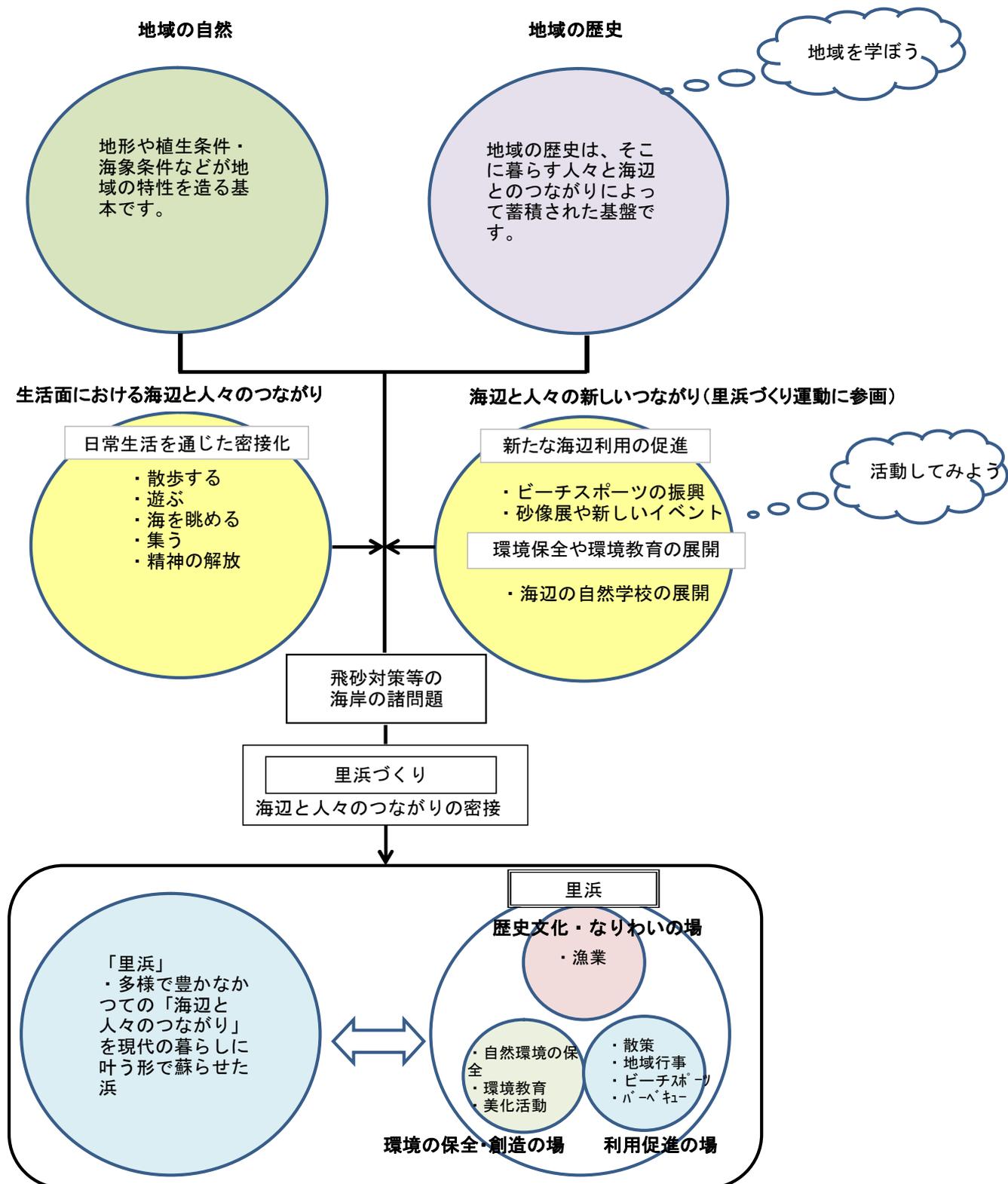


図 1.2.2 一般的里浜づくりのフロー

2. 里浜づくりに向けて

平成18年度～平成19年度の2年間にわたり行われた『芦屋の里浜づくりワークショップ』では、「里浜づくりの進むべき方向性となる基本方針について合意形成することができました。

今年度は、こうした基本方針にしたがって、芦屋の里浜を実現するために飛砂対策としての**松林の造成等に関する技術的課題**について検討を行う『**技術検討会**』ならびに、松林を含めた砂浜を地域の恒久的な財産として、広く市民と行政の協働により長期的に“育て”“守り”“活用”する方法を検討する『**実行委員会**』を設置することとなりました。

これまでに、実行委員会に先立って、「第1回芦屋の里浜づくり技術検討会」（平成20年10月1日）、「第2回芦屋の里浜づくり技術検討会」（平成20年12月3日）が開催されました。ここでは、「前砂丘・植栽による飛砂対策」や「各施設の施工方法、施工手順」などをはじめとする施設整備計画に関する多くの課題について、詳細な技術的検討を行い『施設整備計画』（資料6）を成果として得ています。

「技術検討会」「実行委員会」の構成を以下に、里浜づくりの流れを次頁の模式図に示します。

（1）ワークショップの構成

- ①参加者：地域住民
- ②アドバイザー：学識経験者
- ③オブザーバー：国土交通省、芦屋町
- ④事務局：福岡県、(株)三洋コンサルタント

（2）技術検討会の構成

- ⑤検討委員：学識経験者、国土交通省、芦屋町、福岡県
- ⑥事務局：芦屋町、福岡県、(株)三洋コンサルタント

（3）実行委員会の構成（案）

- ⑦実行委員：学識経験者、ワークショップ参加者、地元住民、各種団体等
- ⑧オブザーバー：国土交通省、航空自衛隊芦屋基地
- ⑨事務局：芦屋町、福岡県、(株)三洋コンサルタント

2.1 芦屋の里浜づくりワークショップ

芦屋港海岸では、冬季風浪により砂浜の背後にあるふ頭用地や遊歩道において、飛砂による砂の堆積が問題となっています。平成18年度～平成19年度の2年間にわたり「地域の住民」「行政」「専門家」といった個々の主体が海辺について議論するための『芦屋の里浜づくりワークショップ』を合計6回開催しました。

その結果、全体案として以下に示す内容およびイメージ図（図2.1.2）が合意されました。

全体案(ワークショップ合意内容)

1. 現況の地形(砂浜形状)を生かしたランドデザインとする

2. 人工構造物ではない、松林や植栽による飛砂対策とし、子や孫の代まで長く作り育てることで、地域の財産となる松林を目指す

3. (上記を達成するために)地域住民だけでなく、広い範囲で『呼びかけ』(一般市民の参加)を行う



図 2.1.2 イメージ図

2.2 技術検討会

(1) 目的

技術検討会は芦屋の里浜づくりワークショップで合意形成された里浜像全体に基づき里浜整備を実現するために、施策の技術的な検討や事業化の手法検討を行うことを目的とします。

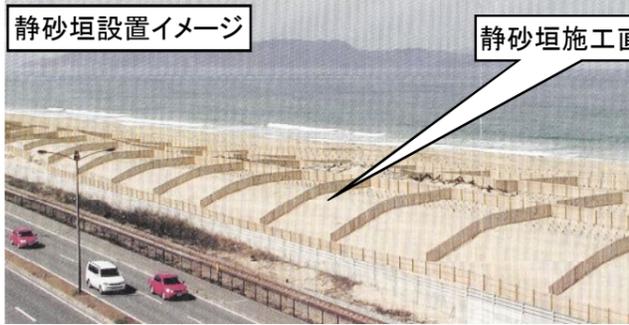
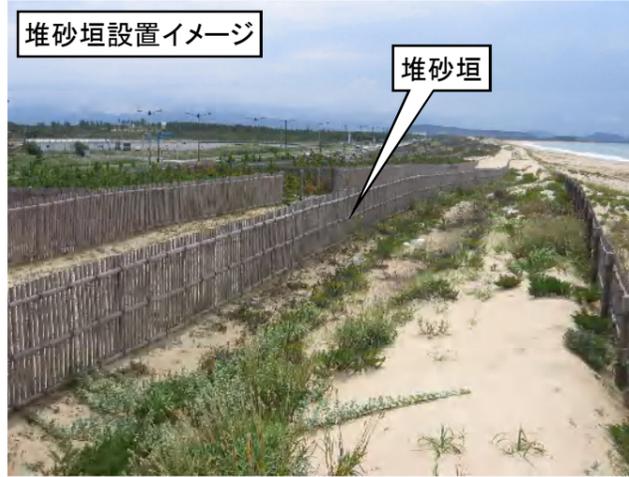
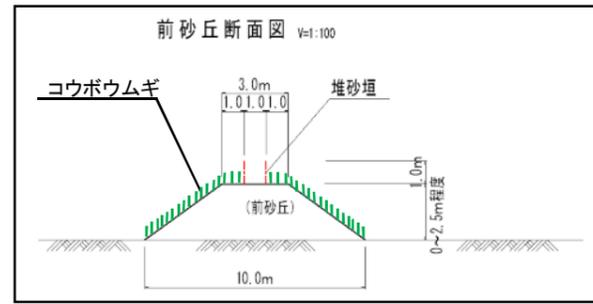
◆里浜づくりの実施項目

- | | |
|-----------|--|
| 前砂丘造成 | : 前砂丘背後に減風域を作り飛砂の防止に効果があります。 |
| 堆砂垣設置 | : 堆砂垣は前砂丘と組合せて、海側から風で送られる砂を捕捉し、背後への砂の移動を軽減させます。 |
| コウボウムギの植栽 | : コウボウムギは、砂の移動により多少埋もれても、上に伸び、生育する性質があり、地表面の砂の移動を抑制します。また、前砂丘の形状の安定化にも効果があります。 |
| 静砂垣設置 | : 静砂垣は、クロマツ幼木の育成区域内への砂の侵入を防ぎ、育成環境を保つことが出来ます。 |
| クロマツの植栽 | : 背後域への防風・飛砂防止の他、防潮の効果があります。 |
| 抵抗性クロマツ植栽 | : クロマツと同様の効果の他、マツクイムシによるマツ枯れ予防効果もあります。 |
| 防砂フェンス設置 | : 防砂フェンスは、より広域な範囲で減風域を確保し飛砂の拡散を防ぐものです。 |
| 管理用道路 | : 松林の維持管理をするため、作業車等が通行する道路です。 |
| 散策路 | : 森林浴や散歩を楽しく行う松林の中の小道です。 |

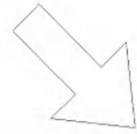
造成計画案（平面図）

※この図面は1/2縮小図面です。

S=1:1,250



風向（北西）



計画汀線

前砂丘（堆砂垣）
緑化（コウボウムギ）

散策路（W=1.2m）

海岸線

静砂垣（10m間隔）
通常ハマツ植栽箇所

管理用道路（W=3.0m）

管理用道路（W=3.0m）

散策路（W=1.2m）

静砂垣（5m間隔）
抵抗性ハマツ植栽箇所

測線No. 1

防砂フェンス（H=3.0m）

防砂フェンスイメージ



2.3 実行委員会

(1) 目的

実行委員会は、松林を含めた砂浜を地域の恒久的な財産として、広く市民と行政の協働により長期的に“育て”“守り”“活用”する方法を検討します。

「芦屋の里浜づくりワークショップ」では、合意形成された全体案として、“～地域の財産となる松林を目指す”としています。そのためには、里浜づくりにおいて地域住民の参加が必要不可欠です。

里浜づくりにおける地域住民の参加形態としては、単発的なものと長期的なものが考えられます。

このうち、単発的なものとしては、クロマツの植林、堆砂垣等の施設整備に関するものや松林の清掃など維持管理に関するもの、その他イベントへの参加が挙げられます。

一方、長期的なものとしては、「芦屋の里浜」のあり方や、地域の財産としての利用・活用方法を様々な段階で議論し、行政との連携、調整を図っていくものがあります。先に挙げたイベント等はこうした組織による活動の一つと位置付けることができます。

芦屋の里浜においても、“～子や孫の代まで長く作り育てる～”里浜づくりを目指すうえで地域住民と行政を結ぶ組織が今後重要になると考えられます。

前ページ（P7）のスケッチは芦屋港海岸の将来イメージ図です。
また、P9は実際の里浜の造成計画案です。堆砂垣や静砂垣、
クロマツ植栽箇所などのイメージ図を示しています。



これらイメージ図から里浜をどう利用あるいは活用したいと考えますか？

里浜を実現するにはどう行動すべきと思いますか？



誰もが行きたくなる里浜像を実現しましょう

